

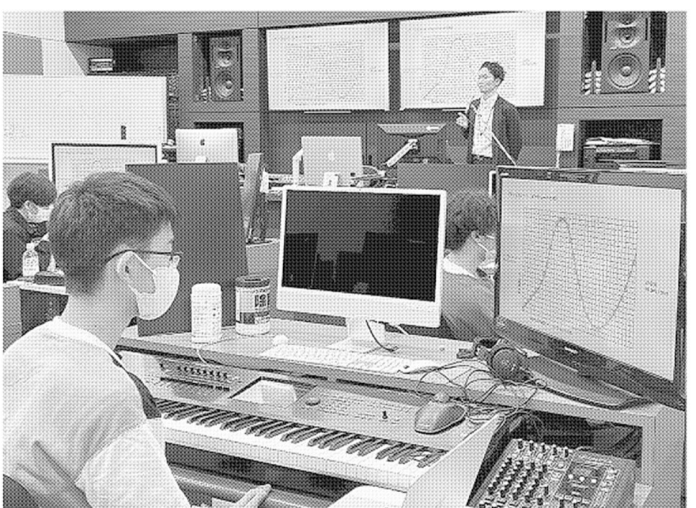
東京音楽大学は4月、「ミュージックビジネス・テクノロジー（MBT）専攻」を新設した。音楽の理論や知識を身につけながら、パソコンを使った楽曲の制作などを体系的に学ぶことができる。音楽関連業界だけでなく、芸術の強みを持ちつつ幅広い企業などで活躍できる人材を育てる。

東京音楽大学 MBT 専攻

ICT分野の人材も育成

開かれていた。学生らは机のスクリーンに映った音の波形を見つめながら、講師の説明に聞き入っていた。データ転送の待ち時間を示す「レイテンシー」や、映像1秒あたりのデータ量を示す「ビットレート」……。この授業では、これまでの東京音楽大で楽器の演奏技術を学ぶ授業ではほとんど耳にしない言葉が飛び交う。

「音大として蓄積した音楽の資源と、情報通信技術（ICT）を掛け合わせ、新しい分野の仕事を切り開いていく人を輩出したい」。MBTの開講を指揮した岡田敦子副学長はこう強調する。東京音楽大は音楽学部・音楽学科を中心とした単科大学だ。音楽や器楽、作曲・指揮などの専攻からなる



パソコンを使った楽曲制作やプログラミングも学べる（ミュージックビジネス・テクノロジー専攻の授業風景）

楽曲制作といった分野にとどまらず、企業のプログラマーやシステムエンジニアなどとしても活躍できる人材の育成を目指す。パソコンを使った音楽制作は専門学校でも学べるが、東京音楽大では演奏の技術のほか、楽曲の分析に関する知見、音楽の歴史といった知識には厚みがある。こうした厚みをMBT専攻に役立てる。コンピューターの基礎やプログラミングの演習、音楽のコーディング技術の科目が必修だ。「ビジネス最前線」と名付けた企業経営者らの講義も必修とした。一方、ピアノや合唱、クラシック、ポップス、民族音楽など音大ならではの

専門科目も履修できる。カリキュラム作成などに携わる渡辺国彦客員教授は「これまで音楽の専門教育を受けていない人も入学し、育ってもらいたい」と話す。そうした観点から、受験の形式もがらりと変えた。既存の専攻の入試では、ピアノなどの高い演奏技術に加え、楽譜を理解し読み書きする「ソルフェージュ」など、音楽の専門知識が必須だ。

これに対し、MBT専攻の入試科目は数学、英語、小論文などで、音楽の専門技術や知識を問わず一般大学と近い範囲にした。年間授業料（入学金や施設使用料は含まない）は約110万円と既存の専攻と比べて40万円ほど安く設定した。4月には50人弱が1期生として入学した。結果として、ほとんどがなんらかの楽器経験者で、作曲経験を持つ人や社会人経験者もいる。「新しい価値観で音楽業界を支えたい、音楽のスキルをビジネスの場で生かしたい学生が集まった」（岡田副学長）

少子化が進み、学生の確保に苦勞する大学も多い。東京音楽大の学生数は減っていないが、国内の音大全体で見れば「冬の時代」といわれることもある。学生の就職支援に力を入れる大学も目立つなか、卒業後の進路が心配というイメージのある芸術系大学は受験で敬遠される面もある。

「常に新しい発想で先進的な取り組みを進めていく」と岡田副学長は話す。創立から約120年の伝統で磨いた音楽教育を新しい時代と融合させる。

（杉山麻衣子）